

資料紹介「鎌倉国宝館開館式 告辞・祝詞・祝辞」

金子 智哉（鎌倉国宝館）

【はじめに】

鎌倉国宝館（以下、国宝館）は、昭和三年四月三日（神武天皇祭で休日であった）に鎌倉町立の博物館として開館した。当日は開館式が開催され、鎌倉市中央図書館には、開館式当日に読み上げられた告辞、祝詞及び祝辞の原稿が所蔵されている。本稿では、この三点の史料を翻刻し、併せて若干の解説を試みたい。

【開館式について】

当館の業務日誌である『鎌倉国宝館庶務日誌』（以下、『庶務日誌』）²では、開館式当日の様子を以下のように伝える（本論で史料を引用するにあたっては、漢字等を概ね現行通用のものに改め、適宜句読点を付す）。

四月三日 火 当直前島

- 一・午前九時ヨリ神奈川県立師範学校講堂。ニ於テ開館式挙ク。来賓者 名⁴。
- 一・午後一時ヨリ一般観覧券販売ス

午後九時、同十一時、午前一時、同三時構内巡視異状ナシ。

鎌倉国宝館には、『庶務日誌』のほかに、開館式の式次第や出席者名簿といった当日の様子を伝える資料は残されていないが、新聞では、比較的詳細な報告がされており貴重である。

四月四日の横浜貿易新報（現神奈川県新聞）には、「花の雨に 國寶館開く 鎌倉八幡宮境内に きのお盛大な擧式」と題した記事が掲載されている。それによると、式には水野鍊太郎文部大臣の代理として下村寿一宗教局長、柴田考査官、池田宏神奈川県知事以下係官、神仏関係者など約五百名が列席した。午前九時五十分沼田弘三助役の挨拶で開会し、設計者である岡田信一郎による工事の報告のあとで、荒川館長が式辞として開館までの経過を説明し、清川町長は告辞で「小鎌倉町の計画ではあるが、事業は全国的である。」と述べた（後述）。水野文部大臣の祝詞

（後述）が代読された後、池田県知事は「公卿文化と武家文化との融合する所は、我が国民性の発露である。」「この精神の盛衰を現すべき珍宝を一堂に収鬼して概覽させることは、まさに当を得たものである。」と述べた。

その後、伊東米治郎鎌倉同人会長、秋岡保司鶴岡八幡宮司（後述）、出品寺院総代である川上道濟円応寺住職等の祝辞をもって式が終了した。別室で祝賀会を催した後は国宝館を開放し、三百名以上の来賓が展示を観覧したという。

なお、四月三日の毎日新聞記事では、開館に向けた展示作業については、文部省国宝審議会（国宝保存会か）委員の萩野伸三郎と奈良美術院技師の明珍恒男の指揮のもとに進められ、開館式前日二日の夜に終えたと伝えられている⁵。

『庶務日誌』の記述と、横浜貿易新報及び毎日新聞の記事（四月三日・四日）を比較すると、『庶務日誌』では午前九時から開館式挙行となっているが、両紙では午前九時五十分からとなっており、時間のずれが見られる。本来は午前九時から開始のところが、何らかの理由で遅れが生じたが、『庶務日誌』は当初の時間を記載したということであろうか。また、『庶務日誌』では午後一時から一般観覧券を販売開始とあるが、新聞では翌四日から一般の観覧を開始するところ。ということは、開館式当日は観覧券の販売のみに留まり、実際に当日の展示を観覧できたのは開館式の招待客に限られたようで、この日は所謂内覧会の位置づけであったと見られる。

【告辞について】

告辞は、鎌倉町長の清川来吉によるものである。清川来吉は、もとは医師で、明治三十五年（一九〇二）に鎌倉町に鎌倉養生院（現清川病院）を開設した。その後、鎌倉町会議員に当選して政治家へ転身し、大正六年（一九一七）に町長に当選した。

法量は縦十七・七cm、全長二四三・八cm、紙数は五紙で一紙目から四紙目までは五十八・九cm、五紙目は八・六cmである。二紙目から五紙目の右端一mmを上にして糊付けしている。折幅は八・一cmで、三十一に折り込まれている。

告辞

我鎌倉が歴史上重要ノ土地デアル事ハ、今更多弁ヲ要シナイ所デアリマス。ケレドモ、従来京都奈良等ガ何レモ古代文化ノ面影ヲ最モ率直ニ、且ツ最モ通俗ニ俾ビ得ベキ博物館ノ設アルニ反シ、鎌倉ガ武家文化ノ中枢デアッタ往時ヲ回顧シ得ベキ適當ナル施設ノナカッタコトハ誠ニ遺憾ノ極デ、亦貴重ナル史蹟保存上ノ一大欠陥デアッタデアリマス。

我等ハ茲ニ鑑ミ、夙ニ宝物館建設ノ必要ヲ痛感シテ居リマシタガ、偶々彼ノ大震災ニ遭ヒ、却テ其ノ機運ヲ促進スル事トハナリマシタ。即チ震災後、各社寺ノ状態ハ疲憊ノ極ニ陥リ、其ノ殿堂復旧ノ途ハ容易ニ確立セズ、マシテ所蔵什宝ノ処置ハ到底完全ヲ期シ難イ有様デアリマシタ。幸ニ国宝ノ類ハ国費ヲ以テ修理ヲ加ヘラレ、辛ジテ朽糜散逸ヲ免レタデアリマスガ、之ヲ納ムベキ营造物ノ復旧セラレタモノナク為ニ、殆ンド雨露ニ汚サレ盜火ノ難ニ脅カサルルノ状況デアリマシタ。之レ我等ノ深く憂慮シマシタ所デ、震災後財政逼迫ノ折ニモ拘ラズ、敢然トシテ国宝館建設ノ一大計画ヲ樹立スルニ至ツタ次第デアリマス。

モトヨリ本館ハ、一小自治団体ノ経営ニ過ギマセンガ、其ノ事業ハ将ニ国家的デアルト信ジマス。

サレバ国家並ニ本県ハ、本町ノ申請ヲ容レテ多額ノ補助金ヲ支出セラレ、朝野ノ有志亦、多大ノ同情ト義挙トヲ以テ本事業ノ遂行ニ寄与セラレマシタ。殊ニ客年特別ノ思召ニ依ル御下賜金ヲ拝受シマシタコトハ、唯に本館ノ名誉ノミナラズ、本町全般ノ光榮ニ存ズル所デアリマス。尚、本計画樹立ノ当初ヨリ、鎌倉同人会ハ恰モ自己ノ事業ナルガ如ク、確固タル責任觀念ト熱烈ナル援助トヲ以テ日夜尽力セラレマシタ。才蔭ヲ以テ、今日斯クノ如ク立派ナル国宝館ガ建設サレ、茲ニ盛大ナル開館式ヲ挙グルニ至リマシタコトハ、真ニ欣快ノ至デアリマス。況ヤ之ニ依テ国宝保存ノ安全ヲ得、豊富ナル史的遺物ヲ展観シテ武家

文化ノ粹ヲ發揮シ、訪古遊覽ノ便ヲ与ヘ、併テ士道教化ヲ資スル上ニ何分ノ効果ヲ収ムルコトガ出来マスナラバ、唯に本館ノ目的達成ヲ祝福スルニ停マラズ、本町将来ノ發展助成ノ為、慶賀ニ堪ヘナイ次第デアリマス。

聊カ蕪辞ヲ列ネ告辞ト致シマス。

昭和三年四月三日

鎌倉町長 清川来吉

先述の横浜貿易新報の記事では、荒川館長が式辞で開館までの経過を説明したとあったが、この清川館長の告辞でも、関東大震災復興事業の一環として国宝館建設の計画が立てられたことを説明している。そして、建設を実現するまでにいただいた、国や神奈川県からの補助金、皇室からの下賜金、有志からの多くの寄付、また、建設にあたって中心的な役割を担った鎌倉同人会、に対し、町長として謝辞を述べている。

なお、冒頭でも述べられているとおり、この時、すでに京都、奈良には、古代文化の面影を一般の人々が最も率直に分かりやすく偲ぶことができる博物館が存在していた。これは、いうまでもなく京都市所管の恩賜京都博物館（現京都国立博物館。大正十三年（一九二四）に皇太子（後の昭和天皇）の成婚を記念して、京都帝室博物館は京都市に下賜された）と宮内省所管の奈良帝室博物館（現奈良国立博物館）を指している。これに対し清川町長は、鎌倉には武家文化の中枢であった中世の時代を振り返るのに相応しい施設がなかったことは極めて遺憾であり、その必要性を痛感していたが、関東大震災を契機に建設の機運が促進されたとしている。

被災した社寺所蔵の国宝は、明治三十年（一八九七）に制定された古社寺保存法に基づき、国費をもって修理されたものの、それを収める社寺の建物の復旧がままならなかったため、これら国宝を保存し、一般に展観すべく国宝館建設の計画が立てられた。

本文中の「モトヨリ本館ハ、一小自治団体ノ経営ニ過ギマセンガ、其ノ事業ハ将

二国家的デアルト信ジマス。」は、先述の新聞記事でも引用されていたが、ここには清川町長の強い自負が伺われる。というのは、そもそも京都、奈良以外に、同じ関東にも東京帝室博物館（現東京国立博物館）が設置されているため、鎌倉の地にこれら帝室博物館のような施設の誘致は現実的ではない¹⁰。かといって、鎌倉町のような小さな自治体の財政力では、建設できる施設の規模にも限界がある。そのことは、告辞の中で「博物館」ではなく、あえて「宝物館」の必要性を述べているところに見え隠れしている。しかし、収蔵品は中世鎌倉の武家文化を象徴する、国宝を中心とした質の非常に高いものであり、規模は小さくとも国を代表する施設の一つであるということで、そこに「鎌倉宝物館」ではなく「鎌倉国宝館」と名付けられた理由があるように思われる¹¹。

【祝詞について】

祝詞は、先述のとおり水野鍊太郎文部大臣の代理として出席した下村宗教局長が代読したものである。

法量は縦十九・四cm、全長一八〇・三cm、紙数は四紙で一紙目は四十八・七cm、二紙目と三紙目は五十一・六cm、四紙目は二十八・七cmである。一紙目から三紙目の左端一mmを上にして糊付けしている。折幅は八・四cmで、二十四に折り込まれている。

祝詞

夫レ鎌倉ノ地ハ、中世覇府ノココニ開カレシ以来、奈良京都ニ次イデ古文化ノ淵叢タリシコトハ謂フヲ須ヒサル所ナリ。ココヲ以テ此ノ地甚ダ史蹟ニ富ミ、マタ古社旧寺随所ニ遺存ス。而シテ是等ノ社寺孰レモ此ノ古文化ノ象徴トモ言フベキ幾多ノ什宝ト文献トヲ蔵シ、其ノ国宝ニ指定セラレタルモノ数十点ニ及ブ。而モ、其ノ地ノ古クシテ星霜ヲ経ルコト多キ古態ノ変遷ニ伴ヒ、旧物ノ湮滅スルモノ少ナカラズ。現ニ先年関東大震災ノ勃発スルヤ、此ノ地マタ其ノ渦

中ニ在リ、被害ノ甚大ナリシハ未ダ人目ニ新ナル所ナリ。鎌倉町ココニ見ル所アリ。唯ニ是等靈宝ヲ現状ニ維持スルノミナラズ、之ヲ永久ニ保存スヘキ途ヲ講センコトヲ志シ、神奈川県当局並ニ知名有識ノ士ノ賛助ヲ得、堅固耐久ノ宝物館建設ノ議ヲ樹テ、政府亦其ノ挙ヲ喜ンデ補助ヲナセリ。此ノ如クニシテ茲ニ鎌倉国宝館ノ竣功ヲ見ル。其ノ施設ノ完備ト地利ノ好適トニ因リ、ヨク古文物維持保存ノ実績ヲ挙クルヲ得テ、国家文運ノ進展ニ貢献スル所甚大ナルモノアルヲ疑ハス。而モ公立国宝館ノ運営ニ付テハ、周到ノ注意ト真摯ノ研鑽トヲ要スヘキヲ以テ当事者諸氏励精努力シ、以テ本館設立ノ趣旨ヲ全ウセラレンコトヲ希フ。一言ヲ陳ヘテ祝詞ニ代フ。

昭和三年四月三日

文部大臣水野鍊太郎

祝詞ではまず、鎌倉が奈良、京都に次ぐ古文化の淵叢であると述べられている。告辞でも触れたとおり、この頃には既に、いずれも明治時代に設立された博物館である、東京、奈良の帝室博物館と京都の恩賜京都博物館が存在していた。中でも京都、奈良の博物館は、天皇中心の古代文化を紹介する施設であった¹²。

このように、明治以降、政府は天皇中心の中央集権国家を目指し、帝室博物館では古代の公家文化の保護と普及に努めてきた。しかし国宝館の開館式において、時の文部大臣が鎌倉を奈良、京都に次ぐ日本の古文化の中心地であると明言し、武家によって生み出された中世鎌倉文化の価値に言及したのである。その後さらに、国宝館を「国家文運ノ進展ニ貢献スル所甚大」と評価し、「公立国宝館ノ運営ニ付テハ、周到ノ注意ト真摯ノ研鑽トヲ要ス」との言葉が続く。社寺の宝物館ではない、自治体が運営する公立の鎌倉国宝館に対し、国宝を保存、展示する施設として政府が大きな期待をかけていたことが伺われる¹³。なお、太平洋戦争中に文部省が主催した「国宝関係博物館事務協議会」において、戦時下の文化財の防護対策等が協議されたが、その時、東京帝室博物館、奈良帝室博物館、恩賜京都博物館、靖国神社

附属就館、大阪市立美術館の五館と並び、鎌倉国宝館も当協議会への出席を要請されている¹⁴。

さて、祝詞では、鎌倉の社寺には、この古文化の象徴とも言うべき多くの什宝や文献が所蔵され、国宝に指定されるものは数十点に及ぶとしている。ここでいう国宝は、古社寺保存法に基づいて指定されたもので、現在の文化財保護法による国宝と区別するために「旧国宝」と呼ばれる。国宝館開館前年の昭和二年当時の鎌倉郡には、七十九件二四点の国宝指定品があり¹⁵、実際は数十点どころか二三百点を超えていた¹⁶。なお、開館当初に作成されたとみられる「鎌倉國寶館出陳目録」に記載されている国宝の数は九十二点であり、鎌倉郡にある国宝の実に四割が国宝館に収蔵、展示されていたことになる。

【祝辞について】

祝辞は、鶴岡八幡宮司であった秋岡保治によるものである。

法量は縦十九・四cm、全長一六一・三cm、紙数は四紙で一紙目は五十一・三cm、二紙目と三紙目は五十一・四cm、四紙目は七・五cmである。一紙目から三紙目の左端一mmを上にして糊付けしている。折幅は七・六cmで、二十三に折り込まれている。一紙目の裏に「祝辞」の文字があり、折り込んだ際に表紙となる。

祝辞

吾等ガ日夕翹望セル国宝館ノ創設、一歳ノ努力空シカラズ、今完ク其ノ工ヲ了ヘ、本日ヲ以テ開館ノ式ヲ挙ゲラル吾等ハ、茲ニ満腔ノ赤誠ヲ披歴シテ恭シク慶賀ノ辞ヲ呈ス。

抑モ象形美術ハ没我入神ノ三昧境ニ味到セシメ、珍什奇籍ハ温故知新ノ理想境ヲ開拓セシム。宜ナルカナ、官規国宝ヲ指定シテ、之ヲ永世ニ伝ヘントスル事ヤ、今吾等ガ敬愛セル鎌倉町当局并ニ有志諸賢、夫レ或ハ茲ニ見ル所アルカ、各所ニ散在セル国宝ヲ蒐集シ、之ヲ一大殿宇ニ整齊シ、遍ク内外人士等ヲシテ

本邦文化ノ精華、史実等ヲ体得セシメ、以テ光輝アル国史ノ顕揚ニ資シ、更ニ進ンデ審美、温知ノ絶対境ニ到達セシメント欲ス。是レ吾等ガ欣喜措ク能ハザル所以ノ第一ナリ。

次ニ、当地ハ彼ノ哲人政治ノ創始者源頼朝公ガ開創ニカカリ、国史上一期ヲ画セル鎌倉文化発祥ノ靈場タリ。而カモ、今茲ニ雄健古今ニ独歩セル鎌府芸術ヲ展開シ、其ノ特有ノ文化ヲ天下ニ周知セシメント欲スルハ、本邦文化教育上、多大ナル貢献ヲ齎スト共ニ、当町興隆ノ一大根源ヲナスモノナリト信ズ。是レ吾人ガ欣喜措ク能ハザル所以ノ第二ナリ。

若シ夫レ輪奐之ノ南都正倉院ニ採リ、茲ニ所謂関東奈良ヲ彷彿セシメタル。更ニ又国宝ノ修理、保存共ニ完備セル等ニ至リテハ、其ノ高見嘆稱措ク能ハザル所、真ニ国宝館ノ名ニ背カザルモノトイフベキナリ。是レ吾等ガ欣喜措ク能ハザル所以ノ第三トス。

以上、聊カ蕪辞ヲ開陳シテ祝賀ノ意ヲ表シ、併セテ将来堅実ナル発展ヲ冀フ。
昭和三年四月三日
秋岡保治

秋岡宮司は、鎌倉の各地に散在している国宝を蒐集し、一大殿宇において展観し、多くの人々に我が国の文化や歴史を体得させることは、国史の顕揚に資すると述べている。古社寺保存法では、社寺の建造物や宝物類の中から、歴史の象徴または美術の模範となるものを「特別保護建造物」または「国宝」として指定することとしており、この秋岡宮司の発言を裏付けるものといえる¹⁷。

古社寺保存法が制定され、国宝が誕生した明治三十年（一八九七）から、国宝館が開館した昭和三年（一九二八）までの三十一年の間で、徐々に国宝という言葉が国内に広まっていったわけだが、この頃の国民の国宝に対する認識が垣間見ることのできる一例を挙げる。

愛媛県の大山祇神社には、大正十五年（一九二六）に設立された大山祇神社国宝

館があり、現在でも国内で国宝、重要文化財に指定されている甲冑、鎧、刀劍等武器の大多数を収蔵している。

『大山祇神社略誌』¹⁸によれば、国宝館設立前の宝物庫は規模狭小で設備も不完全であり、もし火災が起こればひとたまりもないという状況であった。また、古社寺保存法の制定により、国宝の鎧が修理されたことがきっかけで、それらの公開を望む声も高まった。そのため、幾多の曲折を経て国宝保存会なる組織が結成されて国宝館の建設事業にあたることとなり、大正十四年の九月に起工式が、翌十五年六月に竣工式が行われたという。

なお、『大山祇神社略誌』では、俳人の河東碧梧桐が明治四十三年（一九一〇）十一月十二日に宝物庫を訪れた時の言葉を引いている¹⁹。

十一月十二日。半晴、風あり。

（中略）こんな鼠の巢のやうな処に（刀劍を）錆びらかしておくといふことが、全体あり得べき道理のものでない、と滔々として弁ずる。国宝選定方法に幾分不満を抱いてをる我等でも、国家の珍宝をかかるガラクタ同様に放置して顧みぬといふことは、国家の恥辱でもあり、又た損であると思ふ。（新たな宝物館建設にかかる経費は）僅に三万四万の金である。飛行機も作らねばなるまいが、建国精神の象徴とも見るべき重代の宝物はどうなつてもよいといふことはい。已に国宝として、其保存なり修繕なりに多少の補助を与ふる以上、之を適當の場所に陳列して、普く公衆の觀覽に供する必要は多言を費すまでもない。陳列館建築のこともこの神社の事業とするよりも、須らく国家事業として経営すべきである、と吾輩も氣焔を揚げる。

（カッコ書き筆者。以下省略）

この河東の「国宝をガラクタ同様に放置することは国家の恥辱」、「建国精神の象徴としての国宝」、そして「陳列館（国宝館）の建設は国家事業」とすべきであるといった発言は、これまで紹介してきた告辞、祝詞、祝辞の内容にも通じ、関係

者にとって、鎌倉の地に国宝館が開館することへの喜びと期待がいかに大きかったかを改めて知ることができる。

続いて秋岡宮司は、鎌倉を日本史上で一時代を画した鎌倉文化発祥の地としている。そして、この特有の鎌倉文化を天下に周知しようとすることは、我が国の文化教育に多大な貢献をするともに、鎌倉町興隆の一大根源となると述べている。

このように鎌倉の文化を特有のものとするについては、政府も同様であったようである。先述の国宝関係博物館事務協議会について、昭和十七年二月十六日に開催された会議の復命書（国宝館の相澤善三主事が作成）では、各館所有の国宝について、昭和十七年度における他館との交流点数と、新たに陳命令されるものの点数が列挙されているが、鎌倉国宝館については、「鎌倉地方特殊ノ存在トシ、又経費ト係員ト現状ニヨリ交流及新命令ヲナサズ、現状ノマトス。」と記されている。後半の文言については、他の五館より国宝館の財政力が弱く、職員数も少ないなど不利な状況にあることから考慮するという意味と考えられる。一方、冒頭の「鎌倉地方特殊ノ存在トシ」については、国宝館が所蔵する国宝が、源頼朝による中世武家政権の発祥地である鎌倉に伝わって来た武家文化を象徴する宝物類であり、戦時下において現地、つまり鶴岡八幡宮境内に所在する国宝館で展観することに価値のある、全国的にも特殊な存在と認識されていたため、他館に出陳することが見送られたと解釈できるのではないだろうか。

【おわりに】

鎌倉国宝館の開館式は、町立の博物館ながら大臣の代理者をはじめ、約五百名が列席した盛大なものであった。今回紹介した、その開館式に関連する三通の史料を通して、国宝館が単なる一公立博物館ではなく、古代王朝文化を扱う奈良、京都の博物館とは一線を画す、中世武家文化のセンターとしての役割を担うことを期待されていたことが伺い知れる。

また、秋岡宮司の祝辞において、国宝館が国宝の修理と保存設備が完備している旨の記述があったとおり、開館にあたって修理室が設けられ、国宝等の修理を進め

こととなった。国宝をはじめとする社寺の宝物類の保管、展示に留まらず、その修理事業も担っており、鎌倉町にとって、国宝館は震災復興のシンボリック的存在でもあった。

昭和三年三月二日の毎日新聞の記事には、「国宝館付属文部省指定国宝修理所が国宝館開館と同日付けで開所」とある。関東大震災後、鶴岡八幡宮、その後宝戒寺境内に奈良美術院の修理工房が設置されたが²⁰、この記事から、国宝館の修理室は、館独自ではなく文部省の要請を受けて設置したものと推測され、美術院の工房と国宝等修理事業を分担していたようである。

令和四年（二〇二二）には関東大震災百周年を迎えるが、今後、国宝館の修理工房としての機能についても調査を進めていきたい。

1 本稿を成すにあたって、『鎌倉国宝館四十年略史』（一九六九）のほか、左記を参照した。

・長江弘晃「上野博物館開館式祝辞及び泰答文」並解題（『日本大学精神文化研究所・教育制度研究所紀要』第十七号 一九八六年）

・石山洋「源流から辿る近代図書館²³ 帝国図書館開館式と全国図書館員大会の開催」（『日本古書通信』第八八〇号 二〇〇二年十一月）

・吉川慧「資料紹介「高野山圖書館開館之辭」（『高野山大学図書館紀要』第一号 二〇一七年）

2 『庶務日誌』については、拙稿「総論 く戦時下の鎌倉国宝館」（『鎌倉国宝館特別展 開館90周年記念 鎌倉国宝館1937-1945 戦時下の博物館と守り抜かれた名宝』）図録 二〇一八年）参照。

3 神奈川県立師範学校は、正確には神奈川県立師範学校で、現在、その跡地には横浜国立大学教育学部附属鎌倉小・中学校が立地している。会場となった講堂は、落成間もない新しい施設であった。『創立六十年記念誌 神奈川県立師範学校』（一九三五年）参照。

4 原文は人数が空欄となっている。なお、『庶務日誌』には、三月十七日に清川来吉鎌倉町長と荒川巴次館長（就任予定）が来館し、招待客の相談をしたことが記載されている。また、三月二十六日には、職員渡辺幹書記が神奈川県庁、文部省そして内務省へ出張しており、恐らく開館式に向けた最終の打ち合わせを行ったものと想定される。

5 横浜貿易新報及び毎日新聞の四月三日の記事には、来賓として鈴木喜二郎内務大臣の名前が挙げられて

いる。しかし実際に出席したのは、内務省が所管していた史蹟名勝天然記念物調査会の柴田富貴考査官（員）であったようである。

6 拙稿「コラム 鶴岡八幡宮における鎌倉国宝館の建築」（『鎌倉国宝館特別展「国宝 鶴岡八幡宮古神室」図録 二〇二一年）

7 『庶務日誌』には、三月十八日に「文部省ヨリ萩野博士来館サレ陳列品ノ審査ヲナス」とある。

8 拙稿「総論 『鎌倉国宝館庶務日誌』に見る鎌倉国宝館の黎明期」（『鎌倉国宝館特別展「生誕150年記念 間島弟彦と黎明期の鎌倉国宝館 ーその知られざる物語ー」図録 二〇二二年）

9 荒川館長は、鎌倉同人会の第二代理事長であったが、国宝館の初代館長に就任するため、昭和三年一月に理事長を退任している。

10 昭和十六年二月二十七日の報知新聞記事によると、開館後、赤字経営になった際には、国宝館を東京帝室博物館へ寄付し、同館の附属館として経営するという話が持ち上がったことがあったという。経過の詳細については調査を進めたい。

11 拙稿「コラム 古社寺保存法と鎌倉国宝館」（『鎌倉国宝館特別展「鎌倉市制施行80周年記念 名宝巡礼 ー古都鎌倉の祈りのかたちー」図録 二〇一九年）

12 鎌倉国宝館開館90周年記念シンポジウム「鎌倉国宝館90年の歩みとその未来」（『鎌倉市教育委員会文化財部調査研究紀要』第二号 二〇二〇年）

13 本文中に、国宝館の建設に対して政府が喜んで補助したとの記述があるが、具体的には二万円の補助金を支出している。

14 注2前掲論文

15 黒板勝美編『特建國寶目録』（岩波書店 一九二七年）
本書には、明治三十年十二月から昭和二年四月までに指定された国宝と特別保護建造物が収録されている。

16 現在の鎌倉市域のものに加えて、横浜市栄区の證菩提寺が所蔵する重要文化財・木造阿弥陀如来及両脇侍像が含まれている。

17 注11前掲コラム

18 大山祇神社編（一九九七年）

19 原文は、河東碧梧桐『続三千里（下）』（講談社 一九七四年）を参照した。

20 注8前掲論文

告 辞

我鎌倉が歴史上重要ノ土地
 ナル事ハ、今更ニ辨ヲ要シテ
 イ所デアリマス。ケレドモ従来京都
 奈良等が何レモ古代文化ノ面影
 ヲ最モ率直ニ見ユ通俗、他
 七得ヘキ博物館、設ルニ及レ
 鎌倉が武家文化ノ中樞デアッタ
 往時ヲ回顧レ得ヘキ適當ナル
 施設ヲナカッタトハ、詢遺憾ノ
 極テ、亦貴重ナル史蹟保存上

幸ニ國寶類ハ、國費ヲ以テ修
 理ヲ加ヘラレ幸シク朽蝕散逸ヲ
 免レタケイマス。之ヲ勉ムヘキ
 營造物ノ復舊セラヌノナク
 為、殆ンド雨露汚サレ、盜
 火ノ難ニ聲カサレ、状況ガカク
 アリマシタ。之ニ我等、深ク
 憂慮シマシタ所ガ、震災後野政
 逼迫ノ折ニ拘文、敢然トシテ
 國寶館建設ノ一大計畫ヲ樹

立ルニ至ッタ次第デアリマス
 之トヨリ本館ハ、一自治団体ノ
 經營ノ過キマセカ、其ノ事業ハ
 持ニ國家的ナルト信シマス
 サレバ國家並ニ本縣ハ、本町中
 補ノ容テ多額ノ補助金ヲ支出セ
 シ朝野ノ有志亦多大ノ同情ト
 義録ヲ以テ、本事業ノ遂行ニ
 寄與セシマシタ。殊ニ各年ノ
 特別ノ思召ニ依リ御下賜金ヲ

拝受シマシタニハ、當ニ本館ノ
 名譽ノ一トシテ、本町全般ノ光榮
 ニ存スル所デアリマス。高木計畫
 樹立當初ノ鎌倉同人會ハ
 恰ニ自己ノ事業ナレバ如何、確
 固ニ責任觀念ト熱烈ナル
 援助トヲ以テ、日夜盡力セシレ
 マシタ。至陰ヲ以テ今日斯クノ
 如ク立派ニ國寶館ガ建設
 サレ、茲ニ盛大ニ開館式ヲ舉
 ケルニ至リマシタトハ、真ニ欣快ノ
 至デアリマス。況ニ之ニ依リ國
 寶保存ノ安全ヲ得、豐富ナル
 史的遺物ヲ展視シ、武家文
 化ノ特ヲ發揮シ、訪古遊覽、
 便ヲ與ヘ、併シ士道教化資
 ニス上、何分ノ効果ヲ收ムルコト
 出来マシタハ、當ニ本館ノ目的
 達成ヲ祝福スルニ併シ、本
 町將來ノ發展助成ヲ為慶

賀ニ堪ヘナイ次第デアリマス
 聊カ無辞ヲ列示告辞ト
 致シマス
 昭和三年四月三日
 鎌倉町長 清川來吉

祝詞

夫鎌倉ノ地ハ中世
覇府ノコニ開カレシ
以來奈良京都ニ次
イデ古文化ノ淵叢タリ
シコトハ謂ヲ須ニル所
ナリコトヲ以テ此地甚ダ

史蹟ニ富ミマタ古社舊
寺隨處ニ遺存ス而シテ
是等ノ社寺孰トモ此ノ古
文化ノ象徴トモ言フベキ
幾多ク付寶ト文献ヲ藏
シ其ノ國寶ニ指定セラレ
タルモノ數十點ニ及ブ而モ
其地ノ古クシテ星霜ヲ經
ルコト多キ古態ノ變遷ニ
伴ヒ舊物ノ湮滅スルモノ
尠ナカラズ現ニ先年開

東大震災ノ勃發スルヤ
此地マタ其ノ渦中ニ在リ
被害ノ甚大ナリシハ未ダ人
目ニ新ナル所ナリ鎌倉
町コニ見ル所アリ當ニ
是等靈寶ヲ現狀ニ維持
スルノミナラズ之ヲ永久ニ保
存スヘキ途ヲ講ゼンコトヲ志
シ神奈川縣當局竝ニ
知名有識ノ士ノ贊助ヲ得
堅固耐久ノ寶物館建設

ノ識ヲ樹テ政府亦其舉
ヲ喜シテ補助ヲナセリ此
如クニシテ茲ニ鎌倉國寶
館ノ竣功ヲ見ル其ノ施設
ノ完備ト地利ノ好適トニ
回リヨク古文物維持保
存ノ實績ヲ擧クルヲ得テ
國家文運ノ進展ニ貢獻
スル所甚大ナルモノアルヲ疑ハ
ズ而モ公立國寶館ノ運
營ニ付テハ周到ノ注意ト

真摯ノ研鑽トヲ要スヘキ
ヲ以テ當事者諸氏勵
精努力シ以テ本館設立ノ
趣旨ヲ全ウセラレシコトヲ希フ
一言ヲ陳ヘテ祝詞ニ代フ
昭和三年四月三日
文部省水野鍊太郎

祝辭

吾等カ日夕翹望セル國寶
館ノ創設ハ一歲ノ努力ニ空
シカラズ今竟ク其ノ工ヲ了ヘ
本日ヲ以テ開館ノ式ヲ舉
ゲラル吾等ハ茲ニ滿腔ノ赤
誠ヲ披瀝シテ恭ニ慶賀ノ
辭ヲヨムス
抑モ象形美術ハ没我入神
ノ三昧境ニ味到セシメ珍
奇難ハ温故知新ノ理想境
ヲ開拓セシム宜ナルカナ

官規國宝ヲ指定シテ之ヲ
永也ニ傳ヘントスル事ヤ
今吾等カ敬愛セル鎌倉町
當局兼有志諸賢ハ夫レ
或ハ茲ニ見ル所ルカ各所ニ
散在セル國宝ヲ蒐集シ
之ヲ一大殿宇ニ整齊シ
偏ノ内外人士等ヲシテ本邦
文化ノ精華ハ史實等ヲ
体得セシメ以テ光輝アル
國史顯揚ノ資レ更ニ進テ

審美ニ溫和ノ絶對境ニ到達
セシメント欲ス是レ吾等カ
欣喜措ヲ能ガル所以ノ第一
ナリ
次當地ハ彼ノ哲人政治ノ
創始者源賴朝公ノ開創ニ
カリ國史上一期ヲ劃セル鎌倉
文化祭壇ノ靈場ナリ而カモ
今茲ニ雄健古今ノ獨歩セル
鎌倉藝術ヲ展開シ其ノ
特有ノ文化ヲ天下ニ周知セシ
メント欲スルハ本邦文化教育上
多大ノ貢獻ヲ齎スト共ニ

吾町興隆ノ一大根源ヲナス
ナリト信ズ是レ吾人ガ欣喜措
ヲ能ガル所以ノ第一ナリ
若シ史ヲ輪奐之ヲ南都
正倉院ニ採リ茲ニ所謂關東
奈良ヲ彷彿セシメタル更ニ又
國宝ノ修理保存共ニ完備セル
等ニ至リテハ其ノ高見曠稱
措ヲ能ハサル所真ニ國寶館ノ
名ニ背カサルコトイフベキナリ
是レ吾等ガ欣喜措ヲ能ガル
所以ノ第一トス

以上聊カ蕪辭ヲ用陳シテ
祝賀ノ意ヲ表シ併セラ
傳來聖寶ヲ祭展ヲ冀フ
昭和三年四月三日
秋岡保治